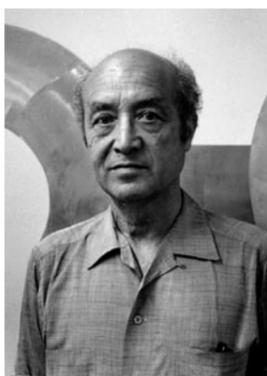


作家の肖像

第 2 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1904-88
ノイ
グサ
ム

イサム・ノグチ

1904年、英文学者で詩人の野口米次郎と、アメリカ人の作家レオニー・ギルモアとの間に生まれる。少年期は日本で育ち、1918年にアメリカへ渡る。彫刻家を志し、アジア・ヨーロッパを旅して見聞を広め、パリでは彫刻家ブランクーシの助手を務める。ニューヨークに居を定め、肖像彫刻、舞台美術を経て環境彫刻やランドスケープ・デザインまで幅広く活動をする。彫刻、モニュメント、環境設計を続け、「地球を彫刻した男」と呼ばれる。

鋭いユーモアのセンス

今から26年前、私がヴェネツィア・ビエンナーレで日本館のコミッションナーを務めたとき、イサム・ノグチはアメリカ代表として、アメリカ館の展示を任されていました。アメリカ館には、彼による数々の彫刻が庭石のように配置され、和紙を使った照明器具「あかり」が天井からつるされていました。あるとき、ノグチは、私のいる日本館にふらっと立ち寄り、「(アメリカ館は)日本館より日本らしいだろ」と、早口の英語で言い、ニヤリと笑って、**颯爽**と立ち去っていきました。彼は、そうやって、いつも冗談交じりにドキッとすることを言う人でした。ノグチはとてもユーモアのセンスのある人です。ただし、そのユーモアは底抜けに明るいものではなくて、**鍛錬**された言葉から生まれる、刃物のように鋭いものでした。

日本への思い

ノグチは、日本人とアメリカ人の間に生まれ、波乱に満ちた人生を送りました。2歳から13歳までを日本で過ごしますが、日本での思い出は決してよいものではありませんでした。いわれのない差別を受け、日本人である父からは拒まれ、孤独を味わいます。しかし、彫刻家として始動するときに、「イサム・ギルモア」というアメリカの姓でなく「イサム・ノグチ」という日本の姓をあえて選んだ。そこには、憧れにも似た父への思い、そしてやはり日本への強い思いがあったのでしょうか。

彼の彫刻には、根底に「日本の庭」の考え方があると思います。日本の

庭は、庭師がデザインした時点で完成するのではなく、その後、自然によって長い時間をかけてつくられていく。そういう深遠な自然観が彼の彫刻にも見られます。ノグチは、作品「スライド・マントラ」について、「この作品は100年後に完成するだろう」と語っていますが、これはまさに、日本の庭と同じ考え方だと思います。

とんでもない天才

彼の作品には、異質なものがせめぎ合っているような、衝突しているような、不思議な緊張感があります。それは、彼が日本とアメリカという二つの故郷をもつことや、孤独な生い立ちであることが関係しているのかもしれませんが。私は、とても温かみのある「あかり」ですら、**静謐**な緊張感が漂っていると思います。

そして何より、ノグチの作品は観る者に力を与えます。例えば、モエレ沼公園。あそこにある山に登って、「雲よ、動け!」と言ったら、雲が動きそうな気がするでしょう(笑)。そんな圧倒的な力が、彼の作品にはあるんです。

ノグチは、ピカソと並ぶぐらいの、とんでもない天才です。彼の作品を観ていると、「彫刻とはなんだろう」「空間とはなんだろう」という問いが次々と生まれてきます。そういう原点的な問題を突きつける、数少ないアーティストの一人だと、私は思います。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
平成24年度版光村図書中学校「美術」代表著者。



上/モエレ沼公園
2005年 北海道札幌市
ノグチが基本設計を行った公園。その壮大さには目を見張るばかりだ。

左下/「ブラック・スライド・マントラ」
黒御影石 高さ360cm 1988年 北海道札幌市
ヴェネツィア・ビエンナーレには、
白大理石の「スライド・マントラ」が出品された。
札幌市にあるのは黒御影石でつくられたもの。(撮影 綿引幸道)

右下/「あかり」展示風景
モエレ沼公園内のガラスのピラミッドでの展示。
ノグチは「和紙が生む光の彫刻」として、「あかり」を連作した。